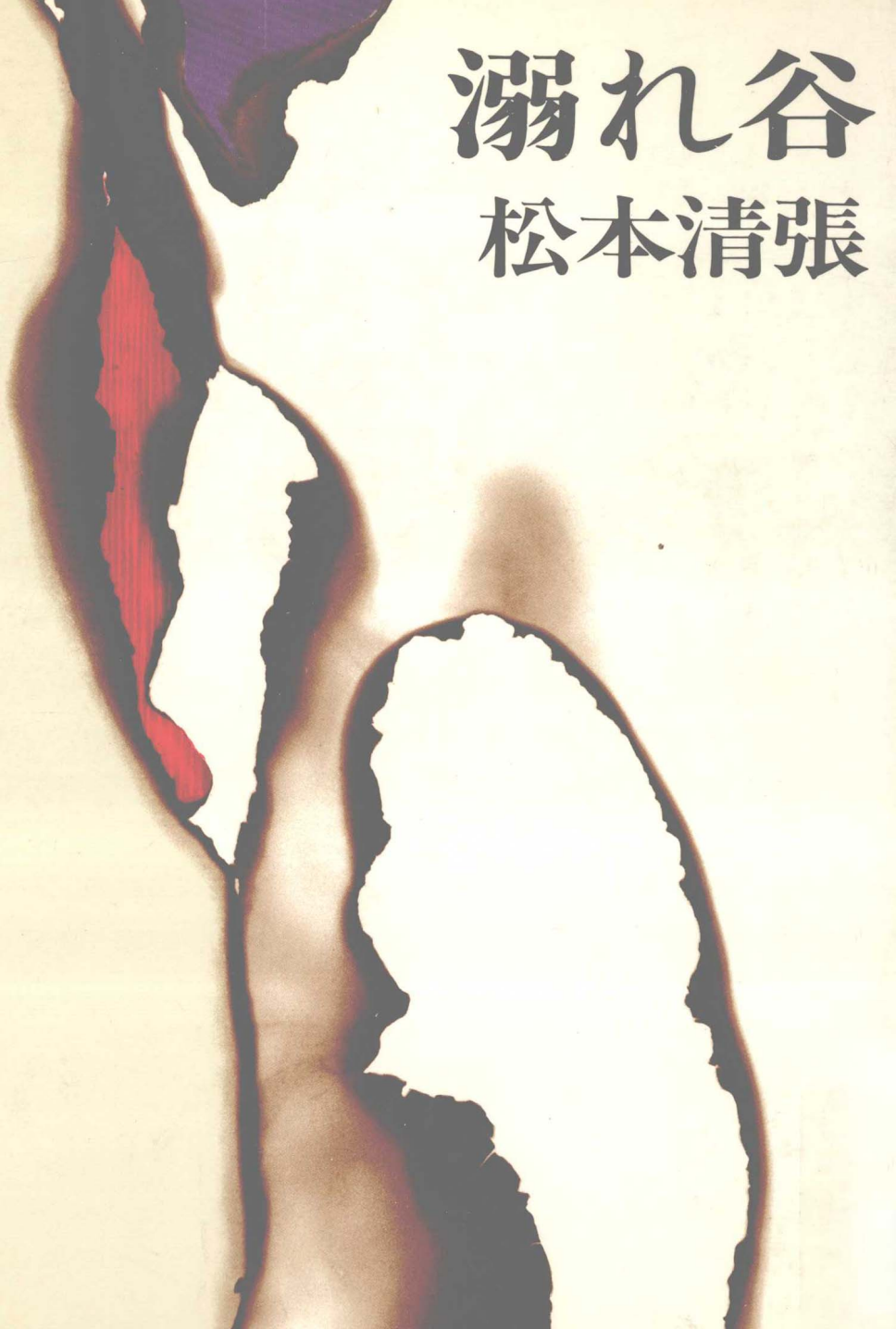


溺れ谷

松本清張



溺れ谷

松本清張

新潮社

溺れ谷

昭和四十一年五月三十一日発行
昭和四十八年六月二十日九刷

定価六〇〇円

著者 松本清張

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話
東京(260)一一一(大代) 振替東京 008

印刷 塚田印刷株式会社

製本 神田加藤製本所

(落丁本はお取替えいたします)

溺

れ

谷

山稜と谷の入りまじった起伏の著しい陸地が沈降すると、河道や溪谷に沿って海水が侵入し、いわゆる溺れ谷 (drowned valley) の現象が起る。(地質学汎論)

早春の美しい朝、東京世田谷区上野毛^{かみのげ}にある山田千江子の家に青年が一人訪ねてきた。

「竜田香具子^{たつたかぐこ}さんはご在宅でしょうか？」

女中に渡した名刺には「政経路線」編集部次長、大屋圭造^{おおや けいぞう}としてある。背の高い男で、色は浅黒いが、大きな眼が光を湛えていた。英国製の生地で作った洋服を着ているから、ネクタイも、靴も、それに相当して贅沢だった。

女中が、はい、と言ったのは、世間では山田千江子よりも竜田香具子のほうが通っているからである。戦前の映画ファンなら、この名前を忘れることはあるまい。近代的な役柄で売出し、数数の主演映画を撮ってきたスターである。今ではときどきテレビに脇役として出演し、往年のオールドファンを懐かしがらせている。

訪問者の青年は、こぢんまりとした応接間に通された。洋間だが、一応、華やかな気分装いがなされている。小さな調度一つ見ても、気の利いた工夫があった。だが、気をつけてみると、それがあまり高価な品でないことが分る。つまり、豪華な意匠^こが凝らされているのである。

訪問者は、その辺をじろじろと見回し、マントルピースの上の飾りものなど、いくらか軽蔑的な眼差で吟味しながら待っていた。さっきの女中が紅茶とケーキを置いてゆく。始終、人が来ることは、その馴れたもてなしぶりでも想像がついた。

ドアが開いて、山田千江子、いや、竜田香具子が派手な色の羽織を着て現われた。年齢^{とし}は四十

を越しているはずだが、五つは若く見える。あいにくと訪問の青年は、戦前、銀幕に出ていた若い頃の竜田香具子を知らないから、テレビの脇役そっくりの実物を迎えた。

面長な顔、やや広めの額、黒っぽい眼、格好のいい鼻と唇、少しばかり長い顎——若い頃はモダンなマスクとして人気を煽ったものだった。

「竜田でございます」

彼女は芸名を言った。これはまだテレビに出演して、その名前が現役で通っているからである。「名刺を差上げました通り、政経路線という雑誌の大屋です」

大屋圭造はお辞儀をして顔をあげ、額に垂れ下がった髪毛を指で掻き上げた。初対面の挨拶が終り、両方で椅子にかけたとき、竜田香具子は少ししゃくれた顔（それが往年のファンにはなかなかモダンに見えて魅力だったものだが）に馴れた微笑を漂わせた。もの怖じしない瞳を訪問者の顔に真っ直ぐに向けているのは、いつも他人から見られている職業の者にありがちの習性である。

もっとも、その表情をもう少し分析すると、新聞記者や雑誌記者（それも芸能記者だが）に向かっているときの、いくらか狎ならされた、そしてどこか媚びのある、さらに、いくぶんの輕蔑を含んだ、そういう混合があった。

「お電話で大体の用件はお話ししましたが……お忙しいところ、どうも」

大屋という編集者のものの言い方は落着いていた。もっとも、この落着きも仔細しさいに觀察すると、職業上の馴れから来ている。いくらか相手を見下ろしているような、それでいて決して表面にはそのことを覺おぼらせない慇懃いんぎんさが破綻はたんなく保たれていた。

「伺いましたわ。丁度今が空あいてる時間でしたので」

竜田香具子はほほえんだが、眼の縁に軽いたるみがふくらんだ。

「閑静な、いいお住居まいですね」

大屋圭造はポケットからケースを取出して煙草をくわえ、用件のほうをひと休みした。これも馴れた余裕である。

「はあ、なんですか、大ぶん家も古くなりましたので」

「やはり前にお建てになっただけに、近ごろのものと違って風格があります。……もう、こちらにはどのくらい？」

「以前は田園調布に居ましたけれど、こちらに越して七、八年になりますわ」

「なるほど。御主人もお忙しくしていらっしやるでしょう？」

「なんですか、毎日ばたばたしているようですけれど、何をやってるのか、わたくしにはよく分りませんわ」

こういう言い方は一種の虚飾かも知らない。夫とは或る程度の距離を置いて自分の生活に自主性を持たせ、それを他人に見せたがる、あの社交性であった。

竜田香具子の夫というのは五つ年上で、貿易商となっている。山田貞一郎という名前は、この訪問に先立って大屋圭造が仕込んできた知識である。

「お羨ましいですね。御主人のほうはお仕事で多忙だし、奥さまのほうはご自分のお仕事で一ぱいだし、それでいてちゃんと円満な家庭を構成されている。ぼくらから見ると、そういうご家庭はいつも新鮮で、変化があつて、近代的だと思われませんが」

「あら、わたくしの仕事のほうはそれほどでもございせんわ。若い方と違って自分の好きなものだけに出ておりますから」

「一応、自分の地位を確立された方は余裕が感じられますよ。最近の若い女優さんはもう背伸びだけが精いっぱい、どんな仕事でもがむしゃらに飛びついてゆきますから。忙しいだけで、結局、空回りに終るようですね」

「時代が違いますわ。わたくしたちの若いときは映画の本数も少なかったし、もっと伸び伸びとしてましたわ。今はずいぶん事情が違うようですね」

往年のスターは、現在の若い世代をあまり快く思っていないようだった。

「そうですとも。だから、昔の方の名前はいつまで経ってもファンが憶えてるわけです。今の人はちょっと出てすぐ消えてしまう。名前など憶える暇もないくらいです。使ってる会社にも責任がありますからね。売れないとなると、見切り方も早い……」

女中が果物を銀の盆に盛って現われた。

「しかし、竜田さんはいつまでもお若くいらっしゃいますね」

訪問者はよく光る眼で女主人をみつめた。

「いいえ、もうおばあちゃんですわ」

「謙遜です。テレビで拝見しても、ちっとも老を感じませんよ。こう言っては失礼ですが、竜田さんが現われただけで、なんだか、画面がぱっと輝くようです」

「まあ、大へん……」

香具子は、細巻の煙草を口にくわえて上品に吸った。訪問者は汐時しおときをよしと思ったのであろう、ここで再び用件に戻った。

「実は、お電話でちょっと申しあげたことですが、わたくしの雑誌では毎号一流の実業家とのインタビューを企画しているんです。それも去年までは経済評論家だとか、文化人だとかいう人

たちを使っていました、どうもあまり新味がないので、今年から女優さんの方に対談のお相手をお願いしています」

「……………」

「新年号は春日月子さん、二月号は峯野紅葉さんでしたが、三月号は若草緑さんを予定しています」

「はあ」

いずれも新進の若手だった。もともと、この三人とも必ずしもスターとはいえないが、いま映画とテレビでしきりと使われている。

「で、対談の相手というのは、新年号が豊国鋳業の望月留吉氏、二月号が日本工業の石田邦介氏、今度出る三月号は三丸デパートの原喜重郎氏です」

「はあ」

三人とも名の知れた実業家だった。殊に三丸デパートの専務は、高名な社長の御曹司である。それを聞いて竜田香具子も眼を輝かした。

「そこで竜田さんをお願いですが、ぜひ竜田さんと対談を希望される実業家がいるんです」

「あら、どなたでしょう？」

こういう場合、適当な羞恥と、適当な積極性と、それから肩透かしの危険性もどこかにのぞかせるとするのが、馴れたタレントだった。

「それがですね、亜細亜製糖の古川恭太さんですよ」

大屋圭造は微笑して言った。

「まあ」

亜細亜製糖社長古川恭太の名前は竜田香具子も知っている。ときどき新聞にも名前が出るし、雑誌などには短い随筆など書いている。香具子にも半白の髪をきれいに分けた初老の紳士の顔が、その名前と一しょに泛^うかんだに違いなかった。

「どうしてわたくしをお名指しになるんでしょう？」

香具子は心持ち顔をかしげて言った。

「さあ、そこですよ。古川さんといえば、ご承知のように、亜細亜製糖ではワンマン的な社長です。これまで他の大手製糖会社に挑んできて、今やそれと肩を並べるくらいに経営的才能のある方です。大へん業界では怖れられているやり手ですが、何といいますか、竜田香具子さんにはすっかり心酔しているんですね」

「ふしぎですわ、まだ一度もお目にかかったことがないのに」

「しかし、先方はえらく熱心ですよ。竜田香具子さんなら対談を引受けてもよろしい、ほかの人ならご免だ、とおっしゃるんです」

「まあ」

「率直に言うと、古川さんは当年六十一歳です。年齢から考えて、竜田香具子さんが活躍していた頃に絶大なファンだったわけです」

竜田香具子はしばらく黙った。

彼女は大屋圭造が差出した「政経路線」の雑誌をめくっている。うすい雑誌だ。全部で百ページぐらいしかない。表紙にはどこかの工場が大きな写真版で載っている。赤と黒の二色刷だった。中を見ると、竜田香具子には興味索^{さく}莫^{ぼく}たる経済記事ばかりである。社業の紹介、経営人の月旦、最近の経済動向、そういったものが羅列してある。

対談のところを開いた。なるほど、眼鏡をかけた老紳士が若い女と話し合っている。前には料理の皿が並び、背景は洋画のかかっている壁だ。どこかのホテルの一室らしい。しかし、「政経路線」とは彼女の知識にない雑誌だった。だから、当然、竜田香具子の質問は慎重となり、雑誌の性格に移った。妙な刊行物には顔を晒さらしたくないのである。

「ご存じないのはごもっともです」

と、大屋圭造はよく光る眼でうなずいた。

「本屋さんの店頭には出していますが、すぐに売切れますのでね。発行部数は五万です。経済誌としては権威のあることで名前が通っています」

「はあ」

竜田香具子是不案内である。経済誌というと、それまで彼女に縁のある芸能週刊誌や、若い女性向きの月刊誌とは世界が違っている。彼女の表情には戸惑いが泛はかんでいた。

しかし、相手の亜細亜製糖社長古川恭太氏は財界で一流人であることは想像がついていた。とにかく、新聞や雑誌に写真や名前がよく出ている人である。

「いかがでしょう、ご承諾願えませんか」

大屋圭造の大きな瞳が愛嬌のある微笑で向かってきていた。

「でも、わたくし、経済には弱いんです」

竜田香具子は気弱なほえみを返した。

「ごもっともです。いや、わが社も別にむずかしいお話をあなたにしていたくつもりはございません。ただ古川氏の前に黙って坐まっていただければ、それで結構なんですよ」

「でも、そいじゃ対談にはなりませんわ。お話、速記を取られるんでしょ？」

「そうなんですが、別に経済的な話はこちらとしても望まないんですよ。いや、かえってザック balan な雑談をしていただければ、それでいいんです。そのほうが記事としては面白いんですよ。ご覧のように、ほかのページは経済記事で充実させていますから、ここで読者にくつろぎを与えたいわけです」

「でも、そんな方にお会いして話題がありませんわ」

「何んでもいいんですよ」

と、大屋圭造は強調した。

「今日は、からはじまって、古川さんはどういうものがお好きですか、とか、お酒の量や、趣味、映画の話、ゴルフの腕前、旅行、何んでも思いつきのまんま話して下すって結構なんです。とにかく、古川さんは竜田香具子さんに会えるということだけで有頂天なんですから」

「まさか……お上手ですわ」

と、竜田香具子は媚びを含んだ眼で雑誌記者を睨んだ。

「とんでもない。正直のままを申しあげてるんです。いうなれば、古川さんにとっては竜田香具子さんが曾ての憧れだったんです。その実物と二人きりで会えて話が交せる、こりゃ古川さんにはうれしいことに違いありません」

「まさか亜細亜製糖の社長さんが……」

「社長といってもファンになると、そこいらの市井人とちつとも変わりありません。いうなれば、功成り名遂げた人が、若いときの憧れの人にじかに会うという満足感……ほら、偉い人によくあるでしょう、おれもここまでやって来たかという、あの満足感ですよ」

「わたくし、そんな人間じゃございませんわ」

「まあ、竜田さん、とにかく、ファンの心理を理解してやって下さい。そうだ、この春日月子さんに会った豊国鉱業の望月社長だって有頂天でしたからね。なにしろ、その対談の写真をわが社に百枚も焼増しさせて各方面に配ったほどです」

「まあ」

竜田香具子は笑い出した。

「いや、笑いごとではありません。実業家として、また経営者として一流の人でも、こういうことになる、そんなものです。ひとつ、竜田さんもぜひ古川さんとの対談を引受けていただけないか」

「わたくし、そんな魅力なんかともありませんわ。もし、古川さんがわたくしにお会いになったら、若いときのイメージがこわれて、とんだ幻滅を感じられるのがオチですわ」

「とんでもありません。古川さんはあなたの最近のテレビは欠かさずに見ているんですよ。古川さんだってもうご年配ですからね。イメージだって年と共にご自分に合うように変わってくるのは当たり前です。現にわたくしがこの話で古川さんのところに伺ったとき、対談のお相手に誰がよろしいでしょうかと言うと、即座にあなただけを指定なすったんですからね。そして子供のように、ね、君、竜田香具子はほんとにぼくのような男と会ってくれるだろうか、そりゃ何度も念を押すんです」

竜田香具子の気持がはずんできたようである。

「その社長さんは、どういう方なんでしょうか？ お会いするとすると、一応、予備知識を持つておかなければなりませんわ」

「ごもっともです。詳しいことはあとでメモにして届けますが、古川さんは、いわば徒手空拳で

今日の地位を築かれた人です。はじめは日東製糖、ほら、日本で一ばん古い大きな砂糖会社ですが、その下っぱの社員をしていたのが、これでは税^{うた}が上がらないというので、丁度、上役と喧嘩をしたのを幸いに飛び出し、小さいながら製糖の会社を起したのがはじまりです」

「それで今日の大を成されたのですね？」

「そうなんです。もともと、中小企業的な製糖会社はいくちもありましたが、占領中は例の企業統合で同業組合的な組織になっていました。そこで、古川さんの発言が相当リードしたのが運がよかったんですね。占領政策が終ると、そういう事業体は一応解散されましたが、その頃から覚えた駆引で今の亜細亜製糖が大きくなったのです。年齢は六十一ですが、今では大手三社に迫るくらいの経営の発展ぶりです。工場も名古屋、大阪、広島、それから、これは甜菜糖ですが、北海道の旭川に一つあります」

こういう話になると、竜田香具子はただ相手から教えてもらっているだけだった。

「趣味は絵とゴルフ、それに暇をみては旅行という程度ですね。なにしろ、忙しい人ですから、旅行もめったにできませんが」

「大体、分りましたわ。わたくし、そんな財界の方とはお話ししたことはありませんけれど、なにも勉強ですから、出させていただきます」

「ああ、そうですか」

大屋圭造は軽く頭を下げて微笑した。

「どうもありがとうございます」

「でも、心配ですわ。うまく話かできるかどうか……トンチンカンなことを言ってお役に立たないかもしれませんよ」

「いや、その点は、ぼくらが横におりますから、適当にあなたに代って調子を合わせます。どうせ、この対談の記事はグラにして古川さんに見せますから、その辺のところは大丈夫です」

「そうですか」

「率直に言つて、古川さんはあなたの顔を見ればいいわけですからね。ぼくらとしても写真版にあなたの顔と名前が載れば、それで効果十分というわけです」

「そんなにおっしゃられると、恥ずかしいわ」

「ところで、お礼の点ですけれど」

「……………」

「まあ、こういった性格の地味な雑誌ですから、とても一般誌のようにには思い切ったお礼が差上げられないのです。その点は、ひとつ、わが社を助けると思つてご協力を願いたいんですが」

「そんなものはどちらでも構いません」

「いや、そういうわけにはいきません。ただ、これが駆出しの女優さんだと、一回について三千元から五千元というところです。むろん、車でお迎えしたりお送りしたりはいたしますが、しかし、竜田さんのような大女優になると、とてもそんな失礼なこととはできません。いかがでしょう、一回一万円というところでは……大へん安くて申しわけないんですけれど」

「結構ですわ」

「そうですか。ありがとうございます」

大屋圭造は改めて頭を下げ、それから、先方の古川恭太の都合と、竜田香具子の時間とを調節して日時を定めたいと言つた。場所は都内の有名なホテルの一室がいつも使う場所だと言ひ添えた。

「事業のことはさっぱり分りませんが、その古川さんの趣味が絵なら、その点で多少は話が合うかも知れませんわね」

竜田香具子はご機嫌になって言った。

それから二週間ばかり経ったところである。

大屋圭造は亜細亜製糖の本社に古川社長を訪ねて行った。受付で前もって時間の約束が取りつけてあると言うと、秘書課に電話で聞き合わせた。

「どうぞ四階の応接間にいらして下さい」

きれいな受付の女が受話器を置きながら大屋圭造を見上げて伝えた。

亜細亜製糖株式会社は赤坂にある。エレベーターで四階に出ると、身ぎれいな青年が入口に立っていた。

「政経路線の方ですか？」

大屋がそうだと言うと、どうぞこちらへ、と応接間に通した。普通だと、なかなかこんな所に通してくれない。ここは役員の応接間でもあるらしく、クッションも豪華だった。壁の上には工場の全景と社長古川恭太の写真が額に嵌^{はま}っている。女の子が入って来て、ケーキと紅茶を置いて退った。これも特別待遇だ。

大屋が息を吸い込むような呼吸をしてクッションにかけていると、壁の写真そっくりの顔の男がゆつたりと入って来た。そのうしろに四十年配の立派な顔の男が従^ついて来ているが、これも秘書だろう。大屋圭造は椅子から急いで起ち上がり、靴の踵^{かかと}を揃えてお辞儀をした。

「お忙しいところをお邪魔いたします」